

第3回学校再編計画策定委員会記録

- 1 日 時 令和2年3月2日（月）午後1時30分～午後4時30分
- 2 場 所 牧之原市役所相良庁舎3階会議室
- 3 参加者 委員10人全員出席
島田桂吾、横田恭子、櫻井真弓、小柳津敏法、石神綾子、
服部真和、種茂和男、赤堀康彦、増田ひとみ、良知恵里香
（順不同・敬称略）

4 要 旨

- これまでの「望ましい教育環境のあり方に関する方針」や国の方向性について学んだこと、市の現状、先進地視察で学んだことを踏まえて、策定委員が新しい学校のイメージを共有するとともに、学校の規模や場所について考えるために必要な材料について検討した。

【協議1「通いたい・通わせたい」と思われる小中一貫校】

- 安心・安全（施設・災害・通学等）が第一であり、都市計画や防災計画等も含めた大きなまちづくりが絡んだ話である。
- 地域との連携が大切。地域の人に関わることで、牧之原らしい体験活動ができる。また、たくさんの目があることが、防犯性を高めるとともに、子どもたちの安定にもつながる。体験活動を授業において知識とリンクさせるとよい。
- 「人格の完成」というところを一つは軸にしながら、今までは学校だけがやっていたことを、これからは「みんなの学校」ということで目的・目標に向かってそれぞれが行動するにあたり、その接着剤として、コミュニティ・スクールや小中一貫、ICT環境を活用する。

【協議2比較する校数と分け方、比較項目及び必要資料について】

- 1～3校を比較し、2校の場合は旧町をベースに地頭方小学校は相良中学校区に、牧之原小中学校は学校単位で相良・榛原のそれぞれに入れた場合で比較する。
- 必要資料は、距離や地形の分かる地図、ハザードマップ、道路の状況が分かる地図、具体的な児童生徒数の推移が分かる資料、人口重心が分かる資料、維持管理費、各種補助金等。
- 上記のものを事務局が用意し、次回1～3校それぞれのメリット・デメリット等について整理をする。

5 意見のまとめ

(1) 協議1「通いたい・通わせたい」と思う小中一貫校とはどんな学校か。 (意見の抜粋)

- 津波や豪雨等の心配がない災害に強い学校。
- 校内の設備が整っていて、職員室や保健室から運動場が見えるなど安全や防犯面を考慮した配置。
- 自転車、徒歩、バスなどいろいろな通学手段が想定されるので、それぞれが安全に通学できる。
- 地域の人々が来やすく、学校と地域の垣根がない学校。いろいろな目があることが防犯的にもよい。
- 柵があつたり、ガードマンがいたりするとよい。
- 子どもが成長したり感動したりする学校。「できた！分かった！」と子どもが実感できるような学校にしたい。
- これからを生きる子どもには、学力だけでなく社会性を身に付けさせることができるようにする。
- そのためには、先生に幅広い人間力で、大事な資質・能力を育てられるように、先生たちへの研修も大切になる。
- 活動を通して子どもの成長を見ることができて、保護者も子どもの成長に感動できるような学校にしたい。
- お茶摘みや畑で作物をつくるなどの実体験は、都会ではなかなかできない。それが牧之原らしきなので、学校の敷地内でそれができるとよい。
- 自分たちのつくった作物を自校給食で調理して食べることができる。
- 図書館やプール、公園などがあり、地域の人々も利用できる。小学校では遊びも学びなので、公園は森のようになっていてもいい。
- 木のぬくもりが感じられる明るい学校。
- 駐車場がちゃんと整備されるとみんなが来易い。
- さまざまな人と交流ができるように、校舎の中にいろいろな人と触れ合うことができるスペースを整える。
- 地域と学校がそれぞれではなく、人、自然、公共施設、さまざまな分野での地域と連携ができ、「みんなの学校」として地域や教育活動をつなぐことができる拠点となる。

【専門家1】

- 安心・安全が第一というのが両グループ共通の意見。その安心・安全は、学校の建物そのものだけではなく、地域のこともあり、歩車分離により安全性や津波防災などを全部含めての安心・安全をこの学校に求めたい

ということで、これはかなり都市計画や防災計画とも絡めていかなければいけない、大きなまちづくりの話となる。

- 地域と連携して、都会では経験できないことを体験させるというのは、そのとおりだと思った。牧之原らしさを出せるような学校にしたい。今までやってきて力点を置いているところは引き続きやっていきたいと思っていると感じた。
- 視察に行ったところは、地域との連携といってもそんなに本気にはやっていないのかと思った。しかし、牧之原は本気でやってきたいという意見があり、地域の人に関わって一緒にやってもらい、それが見守りや子どもたちの安定につながっていく。地域との連携は2つ目のポイント。
- 自然、遊び、公園を含めた地域との連携はハードにもつながる。すごくいいが、行政側に置き換えると、これをやるには教育委員会だけではなくて、都市計画部局と考えていかないと中々実現はできない。部署の垣根を超えたことをしていけないといけないのかと思う。
- 校舎そのものに対する期待としては、ぬくもりや心の安定。生徒も先生も心が安定してつくっていきける場所をつくっていきたい。

【専門家2】

- 共通していたのは、安心・安全。これは立地的なもの、校舎的なこと、防犯のことがあった。それぞれ多様な視点があった。防犯は地域の人がたくさん入ってくることがむしろ防犯性を高めることになる。
- それはコミュニティ・スクールでもかなえられるかと思うし、公民館や地域で講座をやっている大人の人に入ってもらうことでもかなえられるのかと思う。
- ハードとソフトは分かれているようで、それらをつなぐのが、授業や教育活動かと思う。
- リアルな体験活動が牧之原市のよさであれば、それを体験するだけでなく、授業で知識的なところとリンクさせることで、それが子どもたちの「分かった」というところになるかもしれない。地域や保護者にすると、お手伝いに来て、一緒に楽しく学べたり、成長を見ることができたりすることで相乗効果があるのではないか。
- 人間性の育成があったかと思うが、時代が変わっていく中で学校の意義として「人格の完成」というところを一つは軸にしながら、それを今までは学校だけがやっていたが、これからは「みんなの学校」ということで目的・目標に向かってそれぞれがやっていくんだということで、その接着剤をどう示していくか。それが、コミュニティ・スクールだったり、小中一貫だったり、ICT環境だったり、それを活用しながらやっていくことによって、先生たちは新しい時代の教育のあり方を学びながら、先生たちの人間力の育成にもつながっていく。

(2) 協議2 比較する校数と分け方、比較項目、及び必要資料について

- 津波危険地域から山側で地盤がよいところに学校をつくりたい。
- できるだけ人が多く住んでいるところにして、バス通はできるだけ少なく、徒歩と自転車の子どもをできるだけ多くしたい。
⇒距離や地形の分かる地図、ハザードマップが必要。道路の状況が分かるもの。
- 分け方は、海側と山側を分けるという意見もあったが、最終的には旧榛原町、旧相良町に分けて地頭方は相良に入れる。牧之原の学校組合は残すというのが比較資料を用意する上での分け方。
- 2校の分け方としては、牧之原小中学校を榛原中学区、相良中学区のどちらに入れるかは新しい学校の場所による。牧之原小中をどこに入れるかを学校単位で基本的に考えているが、学区内を旧町で分けることも考えられるので地元の人にどんな分け方がよいかは聞いてみたい。
- スタートは、相良・榛原・牧之原でやって、最終的には1校にするという話もあった。今後の人口を考えると1校になっていくのかという議論から、50年後を見据えたときに、3校残してトライアングルにしておいて、どこに人口重心が移っていくのかというのを見ながら1校にしていくのかなと思った。
- 3校については、牧之原小中学校を単独で残すことは人数的に単学級になるので難しいのではないか。
⇒具体的な児童生徒数の推移が分かる資料が必要。
校数は、将来的には1校を見据えながらも、とりあえずは2校か3校くらいで考えるのが現実的ではないか。1～3校の場合で比較検討する。
人口重心が分かる資料
- 廃校になったところの維持費や活用方法も検討していく必要がある。
- 複合施設、プールや公園など、子どもが通うのにいけるのか、ということも論点としてある。
- 学校施設以外だと文科省以外の補助金や都市計画なども絡んでくる。文科省以外の視点での資料あると視点が変わるかもしれない。